研究論文●10

アトピー性皮膚炎と子どものかかる病気の関係について

由井　寅子*

1．目的

ホメオパシー相談会を行う中で，アトピー性皮膚炎を患う人が，ある段階で子どものかかる病気の症状を呈し，それが治癒すると同時にアトピー性皮膚炎が劇的に改善するというケースにしばしば遭遇する。ホメオパシーのケースを通して，子どものかかる病気とアトピー性皮膚炎の関連について考察する。

2．症例呈示

1．症例1

症　例：8歳，女児。アトピー性皮膚炎。

生後3カ月目にアトピーと診断される。5歳まで抗アレルギー薬を定期的に使用。

予防接種歴は，DPT(4回)，ポリオ(2回)，麻疹，風疹，日本脳炎(2回)，BCGで，合計11回の予防接種を生後11カ月から4歳までの間に打つ。母親がアトピーでステロイドを使用していた。また，妊娠中は貧血で鉄剤を3カ月ほど服用。この子どもも虚弱で抗生物質を頻繁に使用しており，出産時も破水したため抗生物質を注射されている。

アトピーもさることながら，皮膚発疹がないのに，毎夜原因不明のかゆみに悩まされる。

ホメオパシーアプローチ：まず原因不明のかゆみを解決しなければならない。体毒の排泄が抑圧されていると考えられるので，抑圧の原因と思われるステロイド，抗生物質，抗ヒスタミン薬の薬害をレメディーで排出させることから始める。約1カ月後，急性症状となり，発熱，発疹が出て排泄が始まるが，その症状は，水疱瘡と酷似するものであった。そこで水疱瘡から作られたレメディーをとらせることで排泄を推し進めた。詳しく聞くと，彼女は4歳のときに水疱瘡にかかり，そのときにステロイドと抗生物質と亜鉛軟膏で抑圧，また5歳のときにとびひにかかるが，そのときも抗生物質と亜鉛軟膏で抑圧していることがわかる。最終的にBCGのレメディーや，水疱瘡のレメディーを最後にもう1回とらせて完了させた。原因不明のかゆみは消失，2カ月後には水疱瘡の症状も完治すると同時にアトピーも劇的に改善する(図1)。

結　論：ホメオパシーにおいては，この原因不明のかゆみは，水疱瘡やとびひが抑圧されたことによると考えられる。水疱瘡やとびひは体内毒を排泄するための浄化作用の1つであるが，これがステロイドや抗生物質によって途中で抑圧されたことにより，膿が皮膚下にとどまり，これがかゆみの原因と考えられる。水疱瘡にかかりきる中でアトピーも改善したということは，子どものかかる病気が抑圧されたり，予防接種によってかかりきることができない現状の中で，体内浄化の機会が失われていることとの関連がうかがえる。

2．症例2

症　例：1歳，男児。アトピー性皮膚炎。

妊娠24週目のとき周囲で風疹がはやり，母親の風疹の抗体価が異常に高く，このまま産めばヘレン・ケラーのような三重苦をもって産まれるかもしれないと医師から

*日本ホメオパシー医学協会

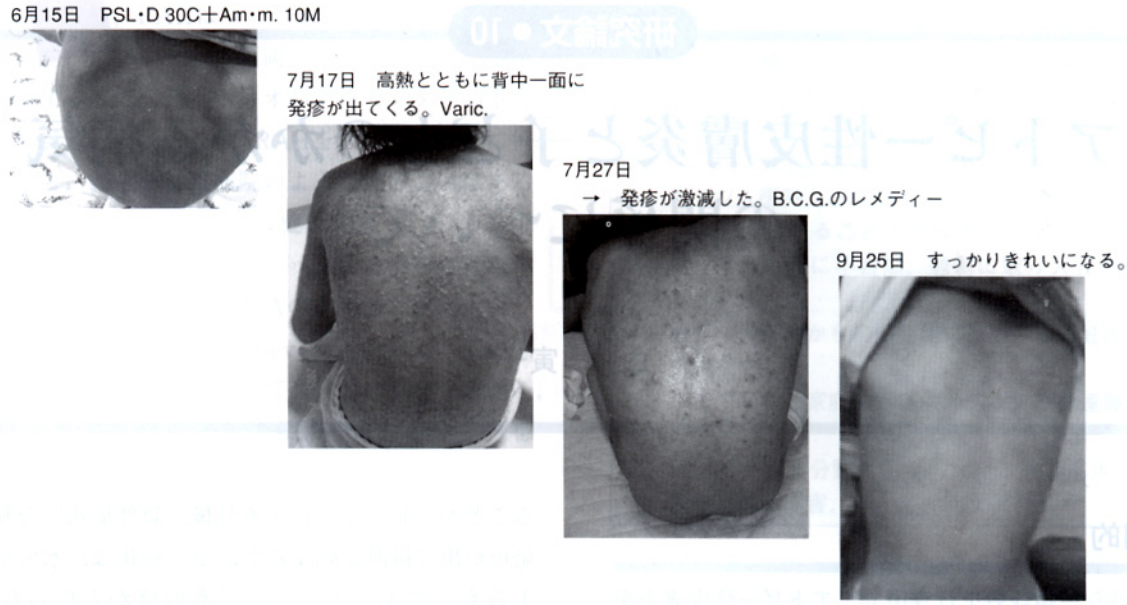

図1　症例1の経過

告げられる。生後3週間目くらいからおでこから赤い湿疹が出始め，どんどん広がっていった。3カ月になると1時間ごとに顔を掻きむしる。皮膚に潰瘍ができ，汁が吹き出る。発疹があるためか，生後2カ月くらいから成長せずに体が小さい。この子は予防接種は受けていない。

ホメオパシーアプローチ：母親が妊娠中に風疹の抗体価が異常に高かったということで，ホメオパシー的に考えると風疹の慢性状態であると推測される。そこで風疹のレメディーと炎症に合うヒスタミンのレメディーを中心に選択する。レメディーをとって1週間目に高熱と風疹の症状を呈するとともに，以前にもましてひどい汁が出る。さらに1週間後に高熱が引き，それから2週間後にまた高熱が出て，皮膚はとても綺麗になる(**図2**)。

結　論：ホメオパシーにおいては，この母親は既に予防接種によって風疹の慢性状態にあったと考えられるが，さらに妊娠中に風疹に感染し，慢性化を推し進めた(予防接種を行っているので，発症することができず，慢性化を推し進めた)と考えられる。当然，赤ん坊にも風疹の慢性状態が引き継がれたであろうし，母親が風疹を症状として出し，体毒を排出する機会が奪われていたために，母親がもつ体毒も引き継がれたと考えられる。もし免疫力が強ければ，子どもは風疹の急性症状を呈し，体毒の排泄が行われると考えられるが(親が予防接種を受けるようになって以降，子どもは乳児の段階ではしかや風疹

図2　症例2の経過

にかかるケースが増えている。これは，親が予防接種によってはしかや風疹の慢性状態となり，赤ん坊がこれを引き継ぎ，はしかや風疹を発症しているのではないかと考えられる)，この子はそれだけの力がなく，アトピー性皮膚炎を発症したと考えられる。ホメオパシー療法を行う中で免疫が高まり，風疹の急性症状を呈し体毒を排泄することができ，それによってアトピー性皮膚炎が改善したと考えられる。

3．結果と考察

ここに挙げた症例以外に，おたふくかぜの症状が出てアトピーが劇的に改善したケースや，はしかの症状を呈してアトピーが劇的に改善したケースが多数ある。ホメオパシーでは，子どものかかる病気は，胎盤や母乳から受け継いだ母親からの体毒，異物，老廃物を排泄する役目や，病気を生み出す土壌(マヤズム)の負荷を減らすなどの大切な役割があると考えるが，その大切な子どものかかる病気がステロイド軟膏や亜鉛軟膏で直接的に抑圧されたり，予防接種によって一気に慢性化させられる(ワクチン病[1])と，病態が変化し，発疹が出続ける慢性状態(＝アトピー性皮膚炎)となるケースが多い[2]と考えられる。

したがってホメオパシーでは，子どものかかる病気を急性症状に戻すために，蓋をしている薬剤の抑圧や予防接種の害を取り除くためのレメディーを与える[3]。こうして子どものかかる病気にかかり直し，かかりきりしっかり体毒を排泄することで，アトピー性皮膚炎が治癒することが多い。また，治癒するときには高熱が出ることもある。

付　　録

予防接種にはたくさんの異物が含まれているが，予防接種を行うことでそれら異物が直接的に血液中に入り込むことになる。血液中に異物が存在し続けると，急性の炎症である高熱や急性の皮膚発疹で排泄することができなくなり，慢性の炎症である微熱が出続ける状態や，慢性の皮膚発疹である湿疹が出続ける状態(アトピー性皮膚炎)になる。例えば，はしか，風疹，水疱瘡の予防接種を行うことで，はしか，風疹，水疱瘡の急性症状から湿疹が出続けるという慢性状態に移行し，こうしてアトピー性皮膚炎が発症するケースが多い。急性の皮膚発疹をステロイドや亜鉛軟膏などで抑圧しても，慢性の湿疹に移行してしまう。この湿疹をステロイドなどで抑圧すると，皮膚から排出することができないので，内側の皮膚である肺などの粘膜から排出しようとして，肺に粘液が溜まり，それを排出するために咳が出るようになる。しかし，ここで気管支拡張薬や咳止め薬で抑圧すると，肺に毒物がとどまり続けるので粘液が溜まり続け，咳が出続けるようになる(喘息)。それをまた気管支拡張薬や咳止め薬で抑圧すると，死に至ることもある[4]。

文　　献

1）J・コンプトン・バーネット：ワクチノーシス，ホメオパシー出版，東京，2005.

2）由井寅子：由井寅子の予防接種と医原病入門，pp. 17-18，22-24，28-29，ホメオパシー出版，東京，2005.

3）ジャン・エルミガー：真の医学の再発見，pp. 104-114，ホメオパシー出版，東京，2006.

4）トレバー・ガン：予防接種は果たして有効か？　pp. 54-57，ホメオパシー出版，東京，2003.